

梅若研能会



写真：【半能】梅若万三郎 撮影：船島写真店

九月公演

令和5年9月21日(木) 午後1時始(開場12時)
於 セルリアンタワー能楽堂
CERULEAN TOWER Noh Theater
26-1 Sakuragaokacho, Shibuya-ku, Tokyo
Thursday 21 September 2023 Start 13:00 (door open 12:00)

セルリアンタワー能楽堂



セルリアンタワー能楽堂
〒150-8512 渋谷区桜丘町26-1 地下2階
TEL 03-3477-6412
渋谷駅から徒歩5分

入場料(全席指定)

指定席A 6,500円 指定席B 5,500円

※学生席(要学生証)各席2,500円引き

お問い合わせ・お申し込み

e+(イープラス)

<https://eplus.jp/ath/word/69495>

カンフェティ TEL:0120(240)5410

<http://www.confetti-web.com/umeken>

公益財団法人 梅若研能会

〒151-0066 渋谷区西原1-4-2 TEL.03(3466)3041

(メールアドレス) staff@umewakakennohkai.com

(ホームページ) <http://www.umewakakennohkai.com>

YouTube 演目の見どころ解説動画を公開中!

Facebook はじめました! 公演情報更新中!

次回予告

令和5年11月16日(金) 午後1時始 於セルリアンタワー能楽堂

舞臺子「葛城」シテ 遠田修

狂言「菖山伏」シテ 野村万蔵

能「清経」シテ 青木一郎、ツレ 青木健一 ほか仕舞二番



写真：【文山立】山本幸枝所蔵

舞臺子「鞍馬天狗」能「半能」みどころ講座

9月2日(土) 14:00~15:30(開場13:30)
於・梅若万三郎家能舞台(渋谷区西原1-4-2)

受講料 1,000円(※研究会入場券購入者は無料)

講師 古室 知也(こむろ ともや)

1971(昭和46)年千葉県市川市生まれ、平成4年梅若万三郎家入門。三世梅若万三郎に師事。公益財団法人梅若研能会評議員、日本能楽会会員(重要無形文化財総合認定保持者)、観世流半能分。平成12年「経正」にて初シテ以降、江東区市川市など都内各地及び近郊のほか静岡県伊東市で能の普及に努めている。市川市在住。



講師 中村 裕(なかむら ひろし)

昭和22年群馬県館林市生まれ、昭和36年梅若万三郎家入門。二世梅若万三郎及び三世梅若万三郎に師事。公益財団法人梅若研能会理事、日本能楽会会員(重要無形文化財総合認定保持者)、観世流半能分。昭和46年「経正」にて初シテ以降、新潟市、足利市のほか中央区など都内各地及び近郊で能の普及に努めている。





老松 梅若 泰志
 敦盛 梅若 久紀
 放下僧 八田 達弥

梅若 志長
 長谷川晴彦
 梅若万佐晴
 青木 健一

舞囃子 鞍馬天狗 シテ 古室 知也

大員 安福 光雄 大員 梶谷 英樹
 小員 古賀 裕己 一噌 隆之

萩原 郁也 加藤 眞悟
 中村 政裕 伊藤 嘉章
 遠田 修

狂言 文山立 シテ(山) 懸 山本泰太郎

アト(山) 懸 大藏 教義

梅若 若松 隆

能半 蒨 中村 裕 休養二十分

演シテ(聖の女) 中村 裕
 後シテ(夕顔の女の世) 福王 和幸
 ア イ(雨の世) 山本瀧太郎

大員 安福 光雄
 小員 古賀 裕己 一噌 隆之

梅若 泰志
 梅若 志長 遠田 修
 梅若 紀佳 梅若 紀長
 梅若 久紀 青木 一郎
 長谷川晴彦 八田 達弥

舞囃子(三時三十分)

演目の見どころ…

舞囃子 鞍馬天狗 (くらまてんぐ)
 平家の権虎達の中で、唯一源氏の子として鞍馬寺で修行を行う牛若丸。そこへ現れた山伏の正体は鞍馬の大天狗(シテ)なのでした。「馬上の黄石公が落とした首を拾い履かせて兵法を授けた漢の名軍師・張良のように、この私を師匠と仰ぐそなたに兵法を授けよう」と牛若に伝えた大天狗は、牛若が成長し平家討伐を成し遂げられるよう力添えすることを約束し、去って行くのでした。

狂言 文山立 (ふみやまだち)
 獲物となる遇行人を見つけたものの取り逃がしてしまった二人の山賊。互いに相手への不満をぶつけると、ついに果たし合いで決着をつけることとなります。見物人も居ない場所で争って死ぬのはむなしい、と書き置きを残すことになり、妻や子を思いやる内容を読み進めるうち、感極まった二人は泣き出してしまい……。
 果たし合いをして死ぬのに、見物人にこだわる時点で、命が惜しくなった二人。文を読む場面は途中から節のついた話がかりとなり妻子へ思いを馳せる姿は、恐ろしい山賊に似せぬ人間性を感じさせます。

能半蒨 (はじとみ)
 「源氏物語」「夕顔」の巻に描かれる光源氏と夕顔の上の恋物語に取材した能。夕顔の世が源氏との出会いの時を思い出して、源氏をひたすら懐かしみ、恋心を語り舞います。
 一番の見どころは、夕顔の世の舞。源氏との恋物語を語り舞うと、そのまま源氏の詠んでくれた歌の初句を詠い、「序ノ舞」を舞います。語り舞の中には、源氏に夕顔の花をさし上げるような動きもあり、ひたすらに源氏を慕う夕顔の心が凝縮された一途の舞といえます。(夕顔)の主人公の正体については、前半の女は花の顔から現れ、そして消えていくことから、夕顔の花そのものとも解釈できるかもしれません。

